

●内山家貸家

「奈良町」の南東部、奈良市紀寺町に所在する貸家。昭和5年（1930）より始まった昭和恐慌の折に建てられたと伝わる。戦前は奈良連隊の中尉などが居住し、その後も平成27年（2015）まで貸家として使用されていた。以後は空き家となっていたが、平成29年（2017）に修理を行い、現在はイベントスペースとして利用されている。

内部は東西に並んだ座敷と六畳間を中心とし、南西に茶の間と土間を突出させる。通り土間の代わりに玄関を設け、縁にガラス障子を建込むなど、戦前の貸家建築の姿をよく伝える。

・内山家貸家（うちやまけかしや）

所在地	奈良市紀寺町
建築年代	昭和前期／平成29年改修
構造・形式・規模	木造平屋建、瓦葺一部金属板葺、建築面積69㎡

●旧長壽會細菌研究所

東大寺戒壇院の北側、奈良市芝辻町に建つ。奈良長壽會は、大正3年（1914）に乳酸菌を利用した健康食品の製造販売を目的として、喜多芳治郎により設立された。当初の事務所は登大路町にあったが、大正末年に現在地に移転し長壽會細菌研究所と改称した。

工場はこの頃に建てられたもので、4棟をコの字型に配置し、外部は下見板張とする。設計者は不明だが、隣地に立つ喜多家住宅主屋（国登録有形文化財）の設計者である大木吉太郎の可能性が高い。内部には滅菌用オートクレーブ、冷却用アンモニア圧縮機など、乳酸菌製品の製造に利用された当時の機器がそのまま残されている。

製品庫は、製造された製品の保管に利用されていたと思われる建物で、1階は土間、2階は板張とする。平成17年末から平成26年頃までは衣料関係の店舗兼工房として利用されていたが、現在はイベントスペースとなっている。

・旧長壽會細菌研究所工場（きゅうちょうじゅかいさいきんけんきゅうしょこうじょう）

所在地	奈良市芝辻町
建築年代	昭和前期／昭和前期増築、平成21年改修
構造・形式・規模	木造平屋建一部2階建、瓦葺、建築面積331㎡、門柱付

・旧長壽會細菌研究所製品庫（きゅうちょうじゅかいさいきんけんきゅうしょせいひんこ）

所在地	奈良市芝辻町
建築年代	昭和前期／平成17年頃、平成26年頃改修
構造・形式・規模	木造2階建、瓦葺、建築面積66㎡

●登彌神社

奈良市西部の丘陵上に位置する古社。幕末までは木嶋明神と呼ばれたが、延喜式神名帳の「登彌神社」に比定され、明治初年に改称した。2月1日には市指定文化財（無形民俗文化財）の粥占いが行われる。

本殿は檜皮葺の一間社春日造2殿を東西に並列したもので、文政7年の棟札が残る。両殿の間には樋を設け床を張り相の間とする。柱は金欄卷、組物は極彩色とし、彩り豊かに飾る。

拝殿は本殿の南方に位置する建物で、社伝によると寛政11年（1799）の建立で昭和14年に改修された。神楽殿であったものを移築したとも伝わる。柱間装置を設けず吹き放ちとし開放的につくる。

神饌所は桁行3間、梁間2間、棧瓦葺の建物で、昭和14年に新築された。内部には調理

台や神饌棚を設ける。小規模ながら均整の取れた建物で、本殿周りの景観形成に寄与している。

手水舎は拝殿の手前、南西の位置に建つ。昭和14年に社格の昇格に併せて整備されたもので、社蔵文書より旧表門を移築改修したことが判明している。三方を内法貫と腰貫で囲め、柱を内転びとし、簡素ながら堅実なつくりを見せる。

社務所は境内南東に建つ入母屋造棧瓦葺の建物で、向唐破風の式台玄関を持つ。東に棟を突出させ、台所とする。設計は滋賀県技手を務めた西本光三郎で、古社寺修理の経験者の手になる正統的な社務所として価値が高い。

・登彌神社本殿（とみじんじゃほんでん）

所在地 奈良市石木町
建築年代 文政7年(1824)
構造・形式・規模 木造平屋建、檜皮葺、建築面積20㎡

・登彌神社拝殿（とみじんじゃはいでん）

所在地 奈良市石木町
建築年代 寛政11年(1799)頃／昭和14年改修
構造・形式・規模 木造平屋建、瓦葺、建築面積31㎡

・登彌神社神饌所（とみじんじゃしんせんしょ）

所在地 奈良市石木町
建築年代 昭和14年
構造・形式・規模 木造平屋建、瓦葺、建築面積14㎡

・登彌神社手水舎（とみじんじゃてみずしゃ）

所在地 奈良市石木町
建築年代 昭和14年
構造・形式・規模 木造平屋建、瓦葺、建築面積5.6㎡

・登彌神社社務所（とみじんじゃしゃむしょ）

所在地 奈良市石木町
建築年代 昭和13年
構造・形式・規模 木造平屋建、瓦葺、建築面積138㎡

●旧真法院（西宮家住宅）

旧真法院は旧妙楽寺（現在の談山神社）の子院の一つで、神仏分離の際に社家に転じた。妙楽寺の子院は明治維新の際には33坊あったが、現在では往時の建物を残すのは3坊のみとなっており、近世子院建築のありようを知る上で貴重である。

客殿及び庫裏は嘉永3年(1850)の建立で、三列九室の周りに鞆の間や縁を取り回した大規模な建物。南西には唐破風を持つ豪壮な玄関、南東には庫裏を付す。

表門は、敷地南方にある棟門（むなもん）で、元は檜皮葺であったが昭和60年頃に棧瓦葺とされた。木柄が太く、柱は良質な檜を用いる。

塀重門は、客殿の西方に繋がる腕木門で、前庭と主庭を画している。表門と同様、元は檜皮葺であったが、昭和60年頃に銅板葺とされた。一軒疎垂木で、軽快な印象を与える。

・旧真法院客殿及び庫裏（西宮家住宅主屋）

（きゅうしんぼういんきやくでんおよびくり（にしみやけじゅうたくおもや））

所在地 桜井市大字多武峰
建築年代 嘉永3年(1850)
構造・形式・規模 木造平屋建、瓦葺、建築面積311㎡

・旧真法院表門（西宮家住宅表門）

（きゅうしんぼういんおもてもん（にしみやけじゅうたくおもてもん））

所在地 桜井市大字多武峰
建築年代 嘉永2年(1849)／昭和60年頃改修
構造・形式・規模 木造、檜皮葺及び瓦仮葺、間口2.4m、左右袖塀付

・旧真法院塀重門（西宮家住宅塀重門）

（きゅうしんぼういんへいじゅうもん（にしみやけじゅうたくへいじゅうもん））

所在地 桜井市大字多武峰
建築年代 嘉永3年(1850)／昭和60年頃改修
構造・形式・規模 木造、檜皮葺（銅板仮葺）、間口2.0m

●旧慈門院（陶原家住宅）

旧真法院と同じく旧妙楽寺の子院の一つで、神仏分離の際に社家となった。主要な建物が良好に保存されているほか、江戸中期の作庭とされる主庭も残り、近世の多武峰の姿を今に伝えている。

客殿及び庫裏の建築年代は定かでないが、寛延4年(1751)の銘がある襖絵があり、江戸中期の建立と思われる。客殿は三列六室を並べ、上手に座敷を置く。東は主庭に開く。襖絵・板絵は重要文化財に指定されており、現在は奈良国立博物館に寄託されている。

持仏堂は梁間2間、桁行3間の小規模な仏堂で、客殿及び庫裏よりは風蝕が少なく江戸後期の建立と思われる。内部は畳敷きとし、東から南に縁を取り回す。

小座敷及び土蔵は、東半の蔵前座敷及び西半の土蔵からなる。建立年代は判然としないが、和釘の使用などから江戸後期と思われる。座敷は六畳と小規模ながら、丁寧な作りで落ち着きを感じさせる。

表門は、敷地南方の石垣上に建つ長屋門で、装飾的な部位は少ないが、檜の良材が多用され、敷地正面を印象づけている。東西の室は納屋・作業場として利用されていたという。

塀重門は、表門と客殿の間に建つ腕木門で、和釘の使用などから江戸末期のものと思われる。花格子入りの棧唐戸を設け、前庭と東の主庭を画す。墓股には麒麟を彫刻し目を引く。

・旧慈門院客殿及び庫裏（陶原家住宅主屋）

（きゅうじもんいんきやくでんおよびくり（すはらけじゅうたくおもや））

所在地 桜井市大字多武峰
建築年代 江戸中期／江戸末期改修
構造・形式・規模 木造平屋建、瓦葺、建築面積308㎡

・旧慈門院持仏堂（陶原家住宅持仏堂）

（きゅうじもんいんじぶつどう（すはらけじゅうたくじぶつどう））

所在地 桜井市大字多武峰
建築年代 江戸後期
構造・形式・規模 木造平屋建、瓦葺、建築面積26㎡

・旧慈門院小座敷及び土蔵（陶原家住宅小座敷及び土蔵）

（きゅうじもんいんこざしきおよびどぞう（すはらけじゅうたくこざしきおよびどぞう））

所在地 桜井市大字多武峰
建築年代 江戸後期
構造・形式・規模 木造2階建、瓦葺、建築面積44㎡

・旧慈門院表門（陶原家住宅表門）

（きゅうじもんいんおもてもん（すはらけじゅうたくおもてもん））

所在地 桜井市大字多武峰
建築年代 明治前期
構造・形式・規模 木造平屋建、瓦葺、建築面積29㎡

・旧慈門院塀重門（陶原家住宅塀重門）

（きゅうじもんいんへいじゅうもん（すはらけじゅうたくへいじゅうもん））

所在地 桜井市大字多武峰
建築年代 江戸末期
構造・形式・規模 木造平屋建、檜皮葺、間口1.7m、左右袖塀付

●莊司家住宅

莊司家は安堵町西安堵に所在し、代々村役を務めた旧家。大和棟の主屋を中心に、別座敷・土蔵などの屋敷構えが一体として良好に保存されている。安堵町所在の建物として初めての登録有形文化財（建造物）。

主屋は敷地西寄に建ち、両妻に落棟、正面に式台玄関を付す。内部は東側に二列四室を設け、ザシキを突出させる。西側には通土間とシモミセを設ける。昭和39年頃に屋根を金属板仮葺に改修したが、下には茅葺がそのまま残る。

別座敷は、家蔵文書より明治32年の建築と思われ、上下階とも床付の座敷を備える。大正後期に庭に突き出す形でケショウベヤを増築した。

新座敷及び稲納屋はもと納屋だった建物で、加工痕などから明治中期に建築されたと思われる。応接空間が手狭となったため、昭和10年頃に北半を改装して座敷とした。

内蔵は切妻造・棧瓦葺・妻入の建物で、和釘の使用などから江戸後期に主屋からやや遅れて建築されたと見られる。主屋に隣接し、道具や書類の保管に使われた。

土蔵は、主屋の北方にあり、片入母屋造・棧瓦葺・平入で、内部は東西に2室に区画されている。新座敷及び稲屋の改修の際に、東側に1間延長された。

米蔵は、敷地の東方北寄に建ち、大正2年の建築を示す文書が残る。内部は東西に2室に分かれており、小屋は和小屋組とする。宅内では最も新しい建物で、屋敷構えの拡張の様相を伝える。

・莊司家住宅主屋（しょうじけじゅうたくおもや）

所在地 生駒郡安堵町西安堵
建築年代 江戸後期／昭和39年頃改修
構造・形式・規模 木造平屋建、茅葺 金属板仮葺 一部瓦葺、建築面積124㎡

・莊司家住宅別座敷（しょうじけじゅうたくべつざしき）

所在地 生駒郡安堵町西安堵
建築年代 明治32年／大正後期増築
構造・形式・規模 木造2階建、瓦葺、建築面積40㎡

・ 荘司家住宅新座敷及び稲納屋（しょうじけじゅうたくしんざしきおよびいなや）

所在地 生駒郡安堵町西安堵
建築年代 明治中期／大正2年頃、昭和10年頃増築
構造・形式・規模 木造平屋建一部2階建、瓦葺、建築面積73㎡

・ 荘司家住宅内蔵（しょうじけじゅうたくうちぐら）

所在地 生駒郡安堵町西安堵
建築年代 江戸後期
構造・形式・規模 木造2階建、瓦葺、建築面積30㎡

・ 荘司家住宅土蔵（しょうじけじゅうたくどぞう）

所在地 生駒郡安堵町西安堵
建築年代 明治中期／昭和10年頃増築
構造・形式・規模 木造2階建、瓦葺、建築面積37㎡

・ 荘司家住宅米蔵（しょうじけじゅうたくこめぐら）

所在地 生駒郡安堵町西安堵
建築年代 大正2年頃
構造・形式・規模 木造2階建、瓦葺、建築面積77㎡